

第二十四回

光照寺報恩講
法話

本講 光照寺住職 池田孝郎 講述

副講 光照寺副住職 池田孝三郎 講述

〈開式挨拶 三輪民子護持会副会長〉

皆様、お忙しい中、御出席下さいまして、有り難うございます。

今日は、真宗門徒の色々ある法要の中で一番大切な報恩講でございます。お天気にも恵まれます。皆様と御一緒にこの報恩講をお勤めさせて頂きますこと、大変光栄に思います。皆様と一緒にのお勤めをさせて頂きます。

今日の報恩講は第二十四回になっております。ご住職のご法話もよく分かって楽しいものだと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

開式の挨拶とさせて頂きます。

〈副住職 法話〉

それでは始めさせていただきたいと思います。お手もとの赤い勤行本をお持ちでいらつしやいますでしょうか。一緒に三帰依文を唱えようと思ひましてお配りいたしました。

南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

それでは『三帰依文』を唱えさせていただきます。通常の流れで、初めの三行と後ろの二行は私が一人でお唱えし、真ん中の一段下がったところを皆でお唱えするということになっております。宜しくお願いいたします。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

みずか ぶつ きてえ
自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
だいどう たいげ
大道を体解して、無上意を發さん。
みずか ほう きてえ
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、

深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大衆を統理して一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

どうもありがとうございます。お齋の後あまり休憩時間がなくご法話へ入らせていただき、皆様の胃であまり消化されていない中で、私がお話をさせていただくことは更に未消化になるのではないかと思います。宜しくお願いいたします。

先ほど皆様の感話と自己紹介のお話をいただきました。皆さんマイクを向けられますと本当にうまく話をされるのだなあと感じました。私でしたらマイクを向けられましたらお話できなくなってしまうのですが。先ほどのお話を聞かせていただいて教えのことだとか、仏教だとか、光照寺のご縁だとか、皆様が様々にご縁をいただいて、今こうして同じ報恩講にお参りさせていた

いています。時間空間を共にしているということが非常に有り難いことだと思っております。

先ほど真四句目下をお勤めしまして、普段お唱えしていないもので光照寺でも唯一この報恩講でお唱えしている『正信偈』真四句目下ということでございます。節がちょっと難しくなつて普段お唱えしていない分、戸惑いながら一緒に唱和したのかと思います。恥ずかしながら、僧侶も一年に一回本当にこの報恩講の為にぶつつけ本番でお唱えしているようなお恥ずかしい次第です。唯、普段の草四句目下と違ってまた重厚な味わいのある節だと感じていただけているかと思いません。それで、先ほど真四句目下をお唱えして、通常というか、仮にカラオケ一曲大体三分、一〇キロカロリー消費するんですね。二〇キロカロリーくらい消費するものもあるでしょうが。先ほど、四〇分か四五分勤行して一〇キロカロリーの仮に一三倍だとして百三十キロカロリーくらい、先ほどの勤行だけで消費しました。もっと力強くお唱えすればさらに消費したということで、私の基礎代謝が千六百カロリー、運動不足の私でも一日二千二百キロカロリー大体消費しているという事で、基礎代謝を引いて六百キロカロリーの六分の一位は先ほどの声明で消費しました。ダイエットをしたい方は声明をお勧めいたします。ということを最初枕にお話しさせていただきました。

報恩講は毎年櫛先生にお越しいただいて、当たり前のようにご法話を頂戴していたことですが、今年は先生のお身体の具合の状況から住職と私が報恩講のお話を担当させていただくことになりました。ここに立たせて頂いているわけです。そういう中で毎年櫛先生が来られていたことが当たり前ではなかったということを痛感し、実感しているわけです。そういうことで、よくお話を聞きますが、上り坂、下り坂、まさか。まさか私が報恩講で法話するとは。さらに真逆様。という今の心境です。

パソコンをやっている方はご承知だと思っておりますが、ローマ字変換でパソコンを入力していくと、スペルを一つ増やすと小さい「っ」が入るのですよね。副住職と入力するとスペルに一つ「っ」が入ってしまう。最近特に多いのですが、パソコンの入力がおぼつかなくなって副住シヨックとでてくるのです。副住は漢字で出て、シヨックはカタカナでシヨックと出てくるのです。パパーとやってスペルが一つ多いと副住シヨックと。これが特に多くなった今日なのです。そういうことがあります。こういう話で最後まで行くかどうかかわかりませんが、ちょっとリラックスしながらお聞き頂ければと思います。

報恩講ということですので先ほども住職が役員さんとの打合せで、報恩講は重いなあと話をしていたのですが、確かに役員の皆様のお手伝いのご協力でこうして報恩講が勤まっていけると。毎年こう大体同じような流れで勤められると。しかし、毎回毎回緊張するし、いつも違った報恩

講で、重くあるし、緊張するし、毎年違った報恩講であると感じております。それでご案内に書かせて頂いておりますが、

「真宗門徒にとって何よりも大切な法要が報恩講です。報恩講は親鸞聖人のご恩徳に報いる仏恩報謝の御仏事として勤められます。」

今日の報恩講に皆様、様々なご縁でご参詣いただきました。天気が良くて本当は旅行だとか行楽に行きたくなるような天気、私も報恩講がなければどこかに出かけていると思います。そういうことなく光照寺の報恩講にご参詣されたということが非常に有り難いと思うのです。そういう意味で光照寺の報恩講にご参詣しようと思う、思い立ったということでこの報恩講が勤まったと言っていると思います。今日、光照寺に行こうと思った、それは返信ハガキを出したそこから始まってくると思うのですが、また今日の体調だとか、電車やバスの具合だとか交通状況とかあるのですが、交通手段を経てここに来た。それだけで十分だと思いますが、そうは問屋が卸さないのです、勤行したり、お話を聞いたり、間違っても副住職がどんな法話をするのかということや参詣された方はいないと思いますので、ここに参詣して一緒に勤めたということや報恩講を大事にしてもらったと一つ思うことでございます。「そうは問屋が卸さない」ということを辞書で調べ

たのですが、

「そ(然)うは問屋が卸さないとは、そうやすやすと相手の望み通りには応じられない。また、物事はやすやすと思う通りに運ぶものではないということのたとえ。」

いろいろ問屋さんとたたき合いがあると思うのですが、思う通りに運ばないということですね。副住職の話も聞かなくてはならないという、思い通りにならないということがあるのです。私たちの人生はいつも問屋が卸してくれない生活の連続ではないかと思えます。以前と言ってもだいぶ前なのですが櫟先生がこういうことをおっしゃっておりました。

「親鸞聖人が立教開宗してくださいさらなかったならば私たちはこの尊い教えに到底遇えなかった。遇えないと救われない。この世に言葉の分かる人間として生まれた無比の尊いことを無駄にしてしまうような私であったが、お蔭様でこの聖人の尊い教えに遇わせていただくことができました。こう喜ばしていただくところから報恩講という法会が伝統されているのです。(櫟先生の法話より抜粋) (H15)」

このようにお話してくださったことがありました。その喜びということなのですが、先ほど土田さんが「受け止められるものもあれば受け止められないものがある。」と感話でお話があった

と思いますが、私も本当に教えに遇って喜んでいないと報恩講が勤められないのか、出来ないのかという疑問を常に抱えながらあります。また、日々の生活でも本当に生活を毎日毎日違う一日だと、一瞬一瞬だと、言葉では言うのですが、そういうふうに使っているのか、やはり明日もあり明後日もあり、又、来年報恩講がありと、そういうことで行事予定をして、予定のように進めていく自分もあるわけです。ただ、本当の世界からすれば死と隣り合わせの「いのち」。「生」です。本当の世界から知らされてくることだと思うのです。頭では理解しているのですよね、ただこの身が本当に頷いているかという事であって、そのことを身が頷いていないから仏教を聞かないとか真宗を聞かないとかいうことではなくて、その問いを持って自己を明らかにしてとか「いのち」を明らかにしていく。そういう歩みが求道くどうの歩みだと思えます。そういうことで報恩講は大体勤めると、一年が終わったなあ。一年は大みそかで終わるのではなくて報恩講が終わると一年が終わるといふ、そういう感じがあります。また同時に消化してゆく行事でありながら、また来年どうしようかなあと思うのです。一年の終わりでもあると同時にまたスタートでもあるとそういうふうを感じるわけです。そういうわけで一年を振り返って今年の歩みはどうだっただろうか、来年はどのように歩いていこうかと感じさせて頂く機会が報恩講ではないかと思えます。

昨年の櫟先生の話では、

「行事として、いつもと違ったお勤めをし、いつもと違ったお飾りをしてお勤めをすれば、それで報恩講は終わったというのではなくて、我々一人一人が、親鸞聖人の教えによって、道を求め、信心をはつきりした求道者にならせていただく。そして生きている間、信心が深化しんかしていく。深まっていく。もう私はわかった、これで終わり、何もいうことはない、そういうところに停止しないで、何もいうことはないのだけれど、その深い意味が、深まって領けていくということに、私たちの一生の意味があると思うのです。」（櫟先生の法話より）（H25）

と、こういうことをおっしゃられておりました。案内の方にも書かせていただきました。深めていくということの大切さを教えられました。それは日々の生活を通して自己を深め道を求めていく大切さを感じさせていただきました。今日は何をお話ししようかと思いましたが、すみません、今までは前置きです。

最近、「ありのままの〜」という歌を良く耳にするのですね。テレビだったり、私はテレビっ子なのでテレビしかないのですが、「ありのまま」という歌がかかっているのですね。それとずっと聞いているとありのままに生きるとはどういうことかということが問題になってきたということです。皆様知っていますよね。知らない人はいないと思います。なぜならばと言うと、先

ほどこから音楽CDをかけていたので、もつと言えば先月からかけていたので。お彼岸の時にかけていたので。一回は最低聴いているはずですよ。「ありのままの」というのはディズニーの映画で大ヒットしたんですね。「アナと雪の女王」というディズニー映画。去年アメリカで公開して、日本で今年公開し始めて、公開一〇〇日で日本歴代三位ということが言われていて、非常に好評なのです。それだけ多くの人が関心を持って映画を見ています。歌も当然聞いています。この歌は映画の中で途中で歌っているのは松たか子、最後のエンディングはMay J.という歌手ですが、吹き替えで松さんは声を担当しているんですね。ちなみに松たか子とMay J.の歌っている歌詞は違うらしいのですけれども、問題は「ありのまま」を英語だと「let it go」を日本語に翻訳し、映画の吹き替えをして、歌詞も日本語の歌詞に替えているということがあるのですよね。「let it go」の「ありのまま」の直訳も直訳でないのも、それでいいのかどうかということがあるので。直訳ですとちょっと変わってきてしまうのだとも思いますし、「let it go」がなぜ「ありのまま」に翻訳されたのか。それは映画の中で英語で話しているのを吹き替えていく中で、「let it go」が「ありのままの（で）」という口の動きが非常に合っているのだというので翻訳者が「ありのままの（で）」と替えたららしいですよ。これは余談なのですが。問題は「ありのまま」ということです。その英語も調べたりしたのですが。そのままの「as it is」とか、飾らない「plain」、そのままにも「as it is」、飾らずに「plainly」とか。英語が全然わからないのですが、いずれにしても

も直訳的には上手く適合しないのではないかとということがあります。映画を見た人はご存じだと思いますのですが、タイトルは「アナと雪の女王」なので、アナは妹さんで雪の女王がお姉さんです。雪の女王のお姉さんが魔法を持っていて魔法を持っていたのです。ある時、感情をむき出しにしたら妹の方に魔法が向いてしまって、妹が仮死状態になってしまい、森の妖精が生き返らせるそういうストーリー展開があります。問題は雪の女王とアナの姉妹が登場人物で、その雪の女王がその魔力を封印していくのですね。そうすると妹を避けて閉じこもりのようになったりして、最後は雪の女王が閉じこもっているのではなくて妹とも触れ合い、人とも触れ合って、無理に自分を閉じ込めたり、封じ込めたりしないで、そういうのは何も心配しないでいい、気にしないでいい、忘れなさいという、こういう展開してくるのですね。そこには姉妹の愛があったり、妹のアナが恋人との真実の愛を確かめ合うとか、そういう内容なのです。

問題は自我、欲望満足のままに生きるということがありのままに生きるということではないということ。そういうことは薄々感じているわけですが、自我、欲望満足のままに生きるのが我のままに生きるという^{わがまま}と我儘になるのですね。我儘^{わがまま}というのを辞書で調べたのですが、

「自分の思いどおりに振る舞うこと。また、そのさま。気まま。ほしいまま。自分勝手。」

というのが、我儘として言われるのです。ちなみに彼女の我儘を可愛いと感じるか、うざいと感じるか、その境界線はどこなのかを男性に聞いてみた人がいるのですね。三つあるというのですね。一、お金が絡むかどうか。二、自分のためだけかどうか。三、面倒くさいかどうか。大体この三つにあてはまってくると男性は女性をうざいと言うらしいですね。なるほどなあと思っただけです。逆にそういった要素が含まれていなければうざいのではなく可愛いと思う。どうしたらうざい我儘が可愛いに感じられるか。その方法が二つあげられていたのですね。一つはお返しをする。二つ目は愛嬌、謙虚さを示す。お返しをするとは、たとえば「あなたこれお願いしますね」と言った時に「今度私がしますから」とか言葉で「ありがとう」とか「申し訳ない」と言葉でお返しをしていく。二つ目の愛嬌、謙虚さも「申し訳ない。お願いしますね」と謙虚さを示せば、うざいのではなく可愛いになる。我儘が可愛いになる。これは余談なので余り真剣に聴かないでいただきたいのですが。

そういうことで「ありのまま」ということで、言ってみれば、「忘れろ 気にするな 心配するな」というようなことでひとつはとらえがちで、私たちは普段何気なく、ありのままにとか使うときはそういう意味が含まれて使うのではないかと思えます。それで私も親にさせていただきました、子供の名前は唯奈ゆいなと言います。話の展開的には三歳がいいのですが、今一歳二か月なの

です。自我が出てきました。「ハイ、ハイ」と物をあげたがるのですね。時たまフェイントもします。「ハイ」と言いながら渡さない。それで笑っている。誰に似たかは置いておいて。お腹が減ったら泣いたり、物をとろうとして「だめだよ」と取らせないように防いだりすると泣く。自分が思い通りにいきたいというのがこの小さい幼児から備わっているということを教えられまして、それは大人になっても同じではないか、思い通りにならない人生を生きているのですね。そういう自分を自覚させていただく。生と死の、死も思い通りにしようとしている。こういうことがあるのではないかと思います。最近本を読んでいた中で本多雅人さんという東京のお寺の方がおられるのですが、

「私たちは日々思う通りにしたいという心根こころねで生きていますが、人生には何も間に合わない問題が次々起こりますから、その心根では絶望につかまってしまいます。つまり、私たちは思いに生きていて現実が受けとめられないのです。もっと言うと、自分の都合のいいことしか受け止められない、そして、自分のいのちすらも都合です。つまり、健康な自分、若い自分はよく、老いた自分、病気の自分をそのまま受けとめることができないのです。そして、最後は死んでいきます。」

「凡夫であるという自覚があたえられれば、仏の道を求めるようになります。凡夫の身のまま

で、仏の眼から人生を見直すことで、この私を回復していくことの大切さ」

と語られておりました。なるほどと読ませていただきました。それから良くご承知の道元禪師は、「仏道とは自己を習うなり」とおっしゃっております。

清沢満之という、明治の宗門の念仏者で学者なのですが、その方は、

「人心じんしんの至奥しおうより出づる至盛しじょうの要求ようきゅうの為に宗教あるなり」 「御進講覚書」
「自己とは何ぞやこれ人生の根本問題なり」 「臘扇記」

こういう言葉をおっしゃっております。自己を一生涯かけて明らかにする歩みを私たちも大事にしたいと思います。では、ありのままを仏教ではどういうふうに言っているかといいますと、如実という言葉が仏教にはあります。如し。実の如し。真実の如し。ちなみに如実ということは、

㊦ 現象の諸相を超えた究極の真理。真如（しんによ）。

㊧ 真実の姿にかなっていること。（仏教辞典）

こういうことが如実の言葉の意味であるわけでございます。本当に真実に適うとか、諸相を超えた究極の真理。真如。本当に難しいわけです。本当に自分自身が真実にかな適った生き方をしているか。それは自分で適っているとは言えませんし、適っていないとも言えません。そこに自己が照らされる視点が大切ではないかと思うのです。ちなみに親鸞聖人は、『愚禿悲歎述懐和讃』で、

「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし」(『愚禿悲歎述懐和讃』五〇八頁)

そういう自己内観。それから、

「罪障功德の体となる こおりとみずのごとくにて こおりおおきにみずおおし さわりおおきに徳おおし」(『高僧和讃』四九三頁)

『高僧和讃』で、障りが多いと言ってもそれは徳が多いのだという転回をされているのは、本当に共感することでございます。それで、最後に、最近曾野綾子さんの「喜びの見つけ方」CD

全一二巻を住職が朝のミーティングでお話されていたのですが、曾野さんは皆様の方がご承知だと思いますけれど、「喜びの見つけ方、自分らしく生きる 満載のCD一二巻」一二巻聞けば自分らしく生きるコツが得られるのではないかということがあるのですね。（笑い）それからここにも第五巻に「人はあるがままでいい」あるがままでいいということも良く聞きますね。ありのままではなくて。曾野さん的には 一、いい人を止める。二、見栄を張らない生活。三、分かち合いの精神。四、友情の在り方。五、感謝の心が人をつなぐ。ということ。私たちは人間関係に悩み苦しむこともあります。そんな厄介な一面も受け入れ、あるがままの自分で穏やかに生きていくために必要なことはということでお話しされているのですね。ここにもありますね。いい人を止めると人生は楽になる。どうでしょうかね。これは皆さんに問いかけただけで終わりたいと思います。時間が迫ってきましたので良い人になるとか、なれないとかは問いかけだけを残します。『歎異抄』第一章の言葉だけ言わせていただきます。『歎異抄』第一章に、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおおるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」（『歎異抄』

第一章六二六頁）

念仏申さんと思う心のおきるとき、先ほど冒頭でこの報恩講にお参りしようと思うとき、その時、副住職の話を嫌でも聴こうと思う時、それはいい人悪い人を超えて順境逆境も超えて今ここにあるということをしみじみと味わうことが出来るのではないかなあと思います。最後に、坊守へ参考程度に先ほどの「ありのままのく」の歌詞、

「ありのままのく♪姿みせるのよく♪」最後は「少しも寒くないわく♪」で終わります。これを少し替え歌しておきます。

「あるがままのく♪ 凡夫でいるのよく♪」「アミダに照らされているわく♪」（笑い）

一応これは研究段階なので私が作るのではないので、後は坊守が吟味して今度替え歌になるかわからないですが参考にしてもらえればと思います。

つたない話でしたが 時間が参りましたので終わらせてもらいます。どうもありがとうございます。ました。

〈資料〉

光照寺 報恩講 法話 骨子

光照寺住職池田孝郎 平成二十六年十月二十六日

一、はじめに、櫟暁先生の講題「真実の宗教」―私にとって報恩とは―を頂き、一貫して流れる「願恩と教恩」を汲んで参りたい。「願恩と教恩」の大前提として、「自他共に救われるか」が問いとしてまずあることです。

二、自力聖道門と他力浄土門の相異点、及び、浄土の真宗を明らかとします。

三、まず、自力聖道門の菩薩修行の構造を明らかとします。

1. 第一に五十二段階階の菩薩階梯を自ら菩提心を起して自力で登りつめる構造です。それは、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺です。四十一段目の十地の初地が初歡喜地、四十七段目の十地の七地が沈空の難として、大きな転回と断絶があることが示されています。

2. 第二に菩薩階梯を端的に表現した唯識という修道五位の階梯として、資量位、加行位、通達位、修習位、究竟位の五段階があり、加行位と通達位、修習位と究竟位の間に大断絶があります。それを見諦所断（見道所断）と修道所断と示されています。この五段階の五位は、四聖諦を前提とした苦諦、集諦、滅諦、道諦を超え、覚者と成る自力修行であることです。

3. 第三に自力修行の必須条件が、六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）であり、戒・定・慧の三学を守り、実行することです。

四、他力浄土門の宗旨を明らかとすれば、如来回向に依って、回心し、断絶を超絶去する浄土の大菩提心であることです。この事は、正法五百年、像法千年、末法一万年とする、三時期の末法に入り、教えのみあって行と証が欠けたと認識した法然上人と親鸞聖人の危機感が浄土宗の立教開宗を命懸けでされた宗教改革であったのです。

五、浄土の真宗は如来回向、本願力回向、他力回向に依って見諦所断の法を断じ、歓喜地を証し、憶念の心常にして、聞・思・修を基に聞法し、如来の生起・本末を了知して、本願を信じ念仏申すところに、進展、深化し、七地已下の未証浄心の菩薩を超え、八地已上の上地の菩薩、等覺、妙覺に、今生に於いて等しいと如来が誉めたまうと親鸞聖人が己証をもって、教行

信 証に顕らかとされました。念仏するその人を弥勒に等しい、如来に等しいと称えられておられます。

ここに自己は、破戒、無戒の底下の愚悪の凡夫と目覚め、慚愧、懺悔し、本願を憶念し、念仏申すところに、本願と相応する乗彼願力の生活が開かれ、生活が行となることです。念仏三昧の行人の誕生です。念仏三昧は三昧の王と経に示されてあります。

六、浄土を志求し、念仏申すところに、自他共に救われる世界を感得し、顕現する。このことを現生不退の位といい、現生正定聚の位とも示されています。

曾我量深師は、こここのところを「如来・我と成る。我は如来にあらず。」又、「往生は心に、成仏は身に。」と言ひ現わされ、自らに如来ましますを己証されておられます。

七、往相のままに還相を仰ぎ見、三世を超えて、今、永遠のいのちに生かされ、生きる。ここに念仏申し現前の自己を生きる。念仏申し歩むままが、本願力回向に依って五念門の行を頂く事が出来るのです。凡夫のままに菩薩たらしめられる歩みです。往相・還相ともに如来回向であることです。願恩と教恩に感謝し、懺悔し、伝承と己証をもって報恩のまことを尽くして参りたい。

八、最後に聖人の到り届いた境地として、願力自然であり、無為自然であり、自然法爾であり、ただ念仏であります。

歎異抄で申せば、第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よき人のおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。」であります。

自力では我々凡夫は仏と成ることは出来ません。ただ念仏して弥陀にたすけられる世界があることは誠に有り難くたのもしく憶うものであります。「念仏申すのみぞ未通りたる大慈悲心にてさうろう」の聖人の言葉が聞こえて来る様であります。「念仏の一道、彼岸に通ずる」であります。いよいよ生死巖頭に立ちお念仏申して参りましょう。

南無阿弥陀仏

〈住職 法話〉

それでは副住職の副講を引き継いで、私、本講ということで勤めさせていただきます。先程、もらってしまったのですが、初めての経験で副住職が副講をやって、私が本講をするのは報恩講二四回目で、お寺を建てて初めての体験でちょっとやりづらいなあと、もらってしまったのですが正直な憶いです。だけど面白いなあと思いました。島根県に岡本義夫先生という方がおられ、九十何歳かになると思いますが、その岡本先生の言った言葉がちょっと閃いたのです。お寺は「浄土の出店」だということが閃いたのです。副住職の出店は若者の出店ではないかと。（笑い）。私はやっぱりちよつとアンティークな、古い中にぴかっと光るか、光らないか、包んでしまうか、そのような出店かなあと、ふと自分で思ってみました。色々な出店があっただけいいのではないかと思います。なるほど若者は若者で面白い出店をしてもらいました。私は私で出店を開いてみたいと思います。皆様のご感想とご質問を後でいただければ嬉しいと思います。

本日は改めまして光照寺の報恩講によくご参集くださいました。浄土真宗は副住職も申しあげましたけれども、もっとも大事な仏事であります。本山ですと一週間のお勤めをされていくわけですが。光照寺は最初から満日中というか、一日の報恩講できました。これが一日あるところ、

三日あるところ、地方によってはあるでしょう。それからもっと伝統的にはお取越といって、各自宅でそれぞれの自宅で報恩講をお勤めして、最後にお寺で報恩講をするということをお取越と言って、伝承してきた歴史があるわけであります。赤尾の道宗は毎日お内仏に参って、毎月はお手次のお寺に参って、年一回は本山に上って報恩講に参ることを実践された人でありました。

（赤尾）
あかおの道宗、もうされそうろう。「一日のたしなみには、あさつとめにかかさじと、たしなめ。一月のたしなみには、ちかきところ、御開山様の御座候うところへまいるべしと、たしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべし」と云々 これを円如様きこしめしおよばれ、「よくもうしたる」と、おおせられそうろう。（『蓮如上人御一代記聞書』八六四頁）

それが本来の浄土真宗、日本で最大の教団を作ってきた歩みではなかったかなあと、思っております。そういう中で、報恩講を大事にしてきた。そういう教団でございます。そんなことを思いながら二四回目の中に、最初の二回は細川巖先生、そのガラス窓に写真がありますが、福岡教育大学の化学の先生であり、仏教の先生でもありました。もう亡くなりましたが、細川先生が二回報恩講にお勤めされ、亡くなっていかれました。その後、三回目から、櫟先生に報恩講を勤

めていただいて、去年まできたわけでした。胆のうの全摘手術をされた後、毎月の聞法会に来られ、東京のウィークリーマンションを借りておられたのですが、そこで倒れられて、救急車で入院されたということでした。心臓にカテーテルを入れて入院され、今九州で静養されていることでもあります。櫟先生は一〇〇歳まで生きたいと申されていました。去年は九〇歳でした。親鸞聖人は九〇歳まで生きられたので、櫟先生は一〇〇歳まで生きられるなあと、思っておりますが、先ほどの、思うとおりにいかない、思いは思いでありました。静養して頂いて、また深いご了解を聴かせていただくのを楽しみにしたいと思います。それに対して、今年には副任職が副講、私が引き継いで、本講ということで、櫟先生の静養中はこの様にお勤めしようと、こういう形をとりました。報恩講は非常に重いのですが、今日はそれ以上に重さを感じて、ここに座らせていただいております。そんなことで、お手元に何を話したらいいかと、私としては、「骨子をレジюме」に書かなくてはいけないと思いました。櫟先生も、毎回資料を出しながら進めてこられましたので、私としましては、「骨子としてのレジюме」をお示して進めるべきだと思いました。それはそれで、ゆっくり読んでいただきたいと思いました。今日は、それだけをお話するのではなくて、あくまでも「骨」でありまして、すべて人間の生体せいたいで言えば「骨」がしっかりして、そこに肉が付き、皮が付き、血管が付き、神経が付き、そして、命を与えられ、動いている実態ですが、その「骨子」というのは「骨」の部分でありまして、それを離れないで、持ち時間を話させ

ていただければと思っております。

櫛先生がずっとお話になった中には、「願恩と教恩」ということを底流に持って、報恩講をお勤めになったわけです。その「願恩と教恩」ということは、親鸞聖人が浄土の真宗を立教開宗されて、他力の宗旨をもって七五〇年前、本当に肉食妻帯として、在家の身として、すべてがたすかるのだと、身を持つての歩みをしてくださった。その教えが『教行信証』となり、『聖典』となって、私の所まで本当に届いてくださったわけです。その教えの恩を忘れるわけにはいかないのです。それは非常に深く、広いわけですから、わずかな時間ではお話しすることはできませんが、その一端をふれていただき、教えの恩をですね、その教えの恩の中に、本願の恩というのがあるわけですよ。阿弥陀様の本願四八願。それをお建てになった法蔵菩薩という、法蔵の御物語として語られる、『大無量寿経』の背景が、やはりこの現在の末法と言われる今日において、誰一人漏れることなく、救われる世界があるのだよ、大丈夫な世界があるのだよ、という本願、その恩ですね。それが、「願恩」というわけでございます。「願恩と教恩」、ここはずっと、櫛先生の報恩講の話の中に流れていたのであります。無論、考えてみれば、これを離れるわけではないわけです。「願恩と教恩」ということはですね。ですから、私も、「願恩と教恩」というものを触れながら、お話をするのがよかろうと思いました。そんなところで、「レジュメとしての骨子」

を書かせていただきました。そこで私は、与えられた一時間を、どのようにお話をさせていた
くかは、この「レジュメ」を、もう一つ噛み砕いてお話ししたいと思って、ここに座らせて頂いて
おります。

先程、副住職が、雪の女王がお姉さんで妹がアナという姉妹の、「ありのまま」という歌をお
寺で掛けていたというのですが、私は知らなかった。流行になっていくのも知らなかった。デ
ズニーランドというのは、浦安にあるのでございましょうが、出来てから一回も行ったことがな
い。(笑い)。デイズニーシーもあると言われても、行きたい、行きたいと思って、子供たちが
小さいころにできたから行こうと、できたところに、子供たちを一回連れて行こうと思ったが、一
回も連れて行かないで、子供たちが大きくなったら、友達と行くとか、学校で行くとかで、結局
行かないのですよね。デイズニーランドも、デイズニーシーも。そして田舎や、地方から来る人
は、まずはデイズニーランドに行くのに、いつでも行けるのに、未だ行かないで、歌われた歌が
一年前からヒットしていると言っても、全然知りません。これだけのずれがあるのです。このず
れを埋めながら話すのは、難しいと思ったわけです。曾野綾子さんの書かれた本というのが、小
学館からダイレクトメールで来るのですね。私は買うとは言わなかったのですが、面白い言葉が
あって、浄土真宗と結構共通する言葉があるという話をしていたのです。そうしたら、副住職が

今日の話にそれを使いたいからそのチラシをくれというので、やるよと、言っていたのが、もう今日使われていたというのが下話です。そのような接点で、「ありのまま」と、それから、「いい人を止めればもつと気が楽だよ」、という言葉でしたか、それは『歎異抄』の、

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」(『歎異抄』第三章六二七頁)

になるし、本当に罪悪深重の凡夫という所が共通するところだし、本当に気が楽になるし、大丈夫だよ、という所に安心が合い、共通するところかなあと、思ったところでした。こういったところで、副住職との接点を持ちながら展開してみようと思いました。

「ありのまま」と、「あるがまま」。曾野綾子さんが、「あるがまま」と、おっしゃっていたようですが、私思ったんですね。確かに日本語として「ありのまま」と「あるがまま」という言葉は、日本語としてあるわけですよ。けれども、私はそこでちょっと引っかかりながら話してみたいのですが、はたして、それで本当に人間はたすかるのかと、問い返してみたいと思います。私は先に答えを言ってしまうと、これは住岡夜晃先生が言われた言葉に帰るわけですが、「あるがままを受け止めて、念仏申す」、という所に落ちないと、「ありのまま」でいいとか、「あるがままがいいのだ」といって、誰が責任をとるのだと。ちょっと無責任ではないかと。「念仏申す」、という所に落ちないと、あかんじゃないのかなと、感じました。「ありのまま」でいいとか、「あ

るがままでいい」と実に素晴らしい言葉だけれども、他人と比較することのない自分が、自分で良いと言ってくれる、もっと大きな背景からの、何というのか、頷きというか、「ありのままでもいいとか、あるがままでいい、あなたはそのままでもいいんだよ、このままでいいんだよ。」というのと、ちよつと違うのではないでしょうか。難しいですよ。微妙なところだと思います。要するに、私たちの存在は自分勝手にございますから、私を見ればよくわかる。こう思います。住職を見ればよくわかります。かといって、自分に振り替えば皆さんもそうではないですか。「いや私は違います。」となるのでは。究極は、皆、一人一人は自我的存在、エゴイスト、自己中心性なのです。「仏法は無我にて候。」と申します。相對して、比較していえば物事は分かり易くなりますが、やっぱり私たちは、「自我」を依り所にして生きている。それを、「ありのままでもいいのだよ、そのままでもいいのだよ。」というところに落ちていいのか、ということになります。それは先ほど、副住職がいったように、結局上り坂、下り坂、まさかの坂で、「ギャツ」と言ったところで、「あなたの自己責任」でおしまいになってしまふ。いい時には、天にも昇るような思いでしょうが、下り坂は空しいでしょう。まさかの時は、もう絶叫したって誰も、本人も、たすけられない。その問題があるのではないのでしょうか。「ありのまま」と「あるがまま」、素晴らしいが、もう一つそれを大きく包んでいる世界を、はっきりいたただけて、「本当にこのままの私、南無阿弥陀仏。」と。「ありのまま、あるがまま。南無阿弥陀仏。」という所が、全然違うの

ではないか、と思うのです。私はいつも憶うのですが、こういう所が一番難しいということになるのかもしれませんが。簡単だけれども難しい。それは私からすれば「唯、南無阿弥陀仏。」を付けるか、付け無いかという話なのですが、南無阿弥陀仏を付けると、「○」で、つけないと、「×」みたいな話は分からないという感覚の壁は、超えるのは非常に難しいです。言ってみれば、そのような壁だと思います。そういうことで、何か私が、副住職の言ったのをかき回して、自分の方に「我田引水」で引っ張ってくるように思うかもしれませんが、「前座」ですから、「前講」です。それから、地ならしをしてくれたら、私はそこに種をまかないといけないわけです。芽が出てきたら、水をやりながら、花を咲かせて、実をならず。本当に皆がそうだなあと、受け止められるようにしないといけないので、非常に難しいですよ。（笑い）。私的には子、公的には副住職、難しいのですよ。住職が、こういう話をするお寺も珍しいのではないかと思います。

この辺で副住職も脱線しましたので、私も脱線してみますと、副住職は、「坊主にならなければ吉本興業に行っていた。」というのですよ。酷いことを言う。営業なのか芸人なのか分からなければいけれど、吉本と言ってその点は確かめて見なかったのですが、どうも芸人みたいなのですね。なぜかと聞かないですよ。彼の言っている言葉から分かったのです。住職は人が笑わないのに、自分が笑ってしまって、住職が笑っても、皆分からないでぼかんとしていると。（笑い）。それは違うのだよと。芸人とは自分が笑わないで、お客さんを笑わして、それがプロというものだと。

それが吉本の芸人。私は言われてみると、自分から笑ってしまつて、相手が何だか分からないのに自分だけ笑ってしまつてシーンとしている。そんなことがあるのか。こういう話で、吉本というのは、芸人の方を目指していたのかと思つたのですけれど。先ほど川澄さんが、講談とか漫才とか、落語の芸能は、浄土真宗の節談説法から生まれてきたのだと。大谷大学の教授が、研究をされていると、以前からその背景はあつたと思うのですが、それが、芸能の裏付けとして今日いろいろ聞かれます。そういうこともあつて、なるほど真宗大谷派、お西も浄土真宗ですが、節談説法は、芸能の日本の原点にあるのかと。ちよつと半分頷きながら、半分頷けない私がここにいると、こんな思いもしております。しかし、これも余談ですが、こういう講談でも落語でも、芸能の世界では泣かせるのと、笑わせるのでは、泣かせる方が簡単だと。笑わせる方が難しいのだと。本当かなあと。笑う方が簡単で、泣かせる方が難しいと思つたのですが。それはさておいて、節談説法の解説を読んでいると、なるほどと思ひました。泣かせるところは泣かせる、ストーリーがあるのですね。そうすると、ちゃんとそこで泣くのですね。ストーリーができていて、ここで笑うとか。だけれども、やはり言っていましたね。泣かせるよりも、笑わせる方が難しいと。芸能の原点である節談説法も、笑わせたり泣かせたりして、感動をわき起こしていったと思ひます。笑うというのは、動物の中で人間だけでしようから。泣くのはどうなのか分からないですけど、笑うというのは難しいのかもしれないね。悲しいというと、人間はどちらかと言うと、

人生悲しみを経ていますから、共通した場面とか、イメージとかに触れると、やっぱりその悲しみの波動が共感して、涙が出るということは、筋書きの中に盛り込めば出来るのでしょね。私はそういうことが下手で、はからいもないのですが、唯、皆笑いもしないのに、自分一人で笑ってしまうという、おかしな節談説法にもならない坊主が、ここに座っておるわけでありませぬ。(笑い)。まあ笑いが少しは聞こえてくるので、少しは良かったなあ、こう思うわけです。そういうことで、これも脱線ですが、副住職の別所の友達で、小学校・中学校の友達で、落語の真打になった人があります。副住職の友人として来ましたよ。真打になるというのは、やっぱり大変だと思えます。真打になったと。だけど副住職は、私のことを貶けなしていますが、友達は真打になり、住職は皆笑わないのに、自分だけ笑って(笑い)。あなたが吉本に行つて、どんな芸人になるか分からないけれど、今頃どうなっていたんだらうかと。唯奈ちゃんが一歳半というけれど、あんな、まともに結婚できて：イヤイヤ(笑い)、こんなこと言うと、国会とか都知事とかと、同じ話になってしまうので、私の人格まで疑われてしまう。これは私の脱線にして、話すのは危なくて誠に申し訳ない。やっぱり念仏がなくてはいけないと。念仏がないと危ないと思うのです。大分脱線しました。(笑い)。光照寺は芸能的性格があるのか、そういうわけではありませぬ。信心の世界に入つていきたいと思えます。

本山からの冊子で、「あいあう」という女性室からの冊子が来ました。それに、「二人に立つ」、この日本語も難しいですね。一人に立つと書いて、「いちにんにたつ」。て、に、を、は、が難しいです。一人に立つというこういう形でイラストがありまして、一人の女性が木の枝に巻かれているような形で、人間なのですが、二本足で立って歩んでいる姿が、イラストのイメージになっております。色々な葛藤の中でひとり大地に立ち歩んでいくというイラストの表現だろうと思うのでございますが、私が言葉でイメージを描いて見せるわけにいかないので、イラストのイメージで見てもらうと、一人一人が大地に立つ。「一人に立つ」ということは色々なしがらみ、葛藤を持ってなお立つことは、大変だと。ということは、イラストを描くというのも大変だなあと思います。その下に「一人に立つ」と。最初は「ひとりにたつ」と読みました。それは、「いちにんにたつ」と小さくルビがふってありました。なるほど「いちにんにたつ」。一人が本当に立つということ、色々な問題、葛藤、色々な物を背負って立って歩むことは、大変なことだと、その表紙にあったわけです。「いちにんに立つ」ということで、私はさて、と思いましたが、『歎異抄』の中に「親鸞一人がためなりけり」という言葉があるわけですね。そこから、「一人に立つ」という言葉が「あいあう」の表紙に使われてきたのだと思えました。問題は、「親鸞一人がためなりけり」という言葉がありますが、それは、何で、親鸞聖人が言われたのか。これは『教行信証』にないわけです。『歎異抄』にあるということは、親鸞のお弟子であります唯円

房が常に聞き、常に親鸞聖人が申されていたのではないか。それが耳の底に残り、その「親鸞一人がためなりけり」ということで、唯円房が『歎異抄』に書いておかれたのではないかと思うのです。そうすると、常のご持言というか、親鸞一人がためなりと、常時言われた言葉ではないかと思うのです。それは何かというと、先ほどの「願恩と教恩」がありましたけれど、本当に阿弥陀様の本願は、私一人がためにおたてになってくださったのだと。本当に法蔵菩薩のご苦勞は、私親鸞一人がためにしてくださったのだという、深い感動が「親鸞一人がためなり」、こういう言葉として、『歎異抄』に記されているのだと。その証として、『教行信証』を書き、このように『和讃』を作り、大谷声明を作り、お手紙を書き、御消息を作り、こうして書かれてきた感動が、ここに、これだけのお仕事をしてくださった。そう思うのです。これが親鸞聖人の「教恩」だと、私は思うのです。これだけ話せば、「願恩と教恩」を話したようなものです。「親鸞一人がためなり」。親鸞聖人だけではないと思いますよ。先ほどの、「あいあう」という本山の機関誌で、女性対象の冊子なんですが、それは一人に立つ。女性だけが立つのではなく、男性もそうです。要するに「私が立つ。」「一人一人が立つ。」「一人いちにんに立つ」ということです。問題は、本当に私が私として、一人立てるか、この問題が先ほど、「ありのまま」とか「あるがまま」とか、いうけれども、「このままの、私は私で良い」と立った私が、自我を依り所として立ったとしても、結局は私は立ちつくせない、これは断言していいのです。なぜ断言できるのかと言うと、

副住職もちょっと触れましたけれども、「生老病死」というものが人間にありますからね。その自己実現で、自分の自我を依り所にして、一人立って自分を実現していききたい。立派だけれども、果たしてその生老病死、困難な人生に立ち向かい、病になり、歳を取り、そうして死していく身の中に、ずっとそれを通していけるのだろうか。それが出来ない。それがお釈迦様ですよ。「四門出遊」という、「四つのお城の門」を出て行ったのは、それが問題だったのです。恵まれていましたよ。私よりか、当然でしょうが。国の王子として生まれ、そして、恵まれた境遇にありませんが悩まれた。それは、私たちが悩まれた悩みと比較をしてもいけないかもしれないけれど、では、「何だろうか」、と言ったら「生老病死」なのです。東の門に老人がいる、南の門に病人がいる、西の門に亡くなった方がいる、北の門に修行者がいたと。こういう中に、自分も修行者になって、そういう生老病死を超えて無常なる世界、本当に全てが苦であるという世界を超えた世界に至りたいと言って、城を出るわけです。「厳苦六年。」尚、悟れずとして山を下りて、丁度そのガラス戸の中に、骸骨のようなお釈迦様の苦行像、細川先生の写真の横にあります。前にインドに行って買って来たのですが、以前には、日本にも来た等身大の苦行像でしたが、インドでミニチュアを買ってきました。あの骸骨になって、骨だけになって、骨に皮が張り付いたようになって、骨が浮き出ているように修行して、悟れないと言って、山を下りた。菩提樹の下で結跏趺坐して、悟るまでは立たじと。七日目の暁の明星の中で、魔を降くだして悟ったということす

よ。それは、悟った話を、話せるかという問題です。それが話せない。自らが四七の間、悟りの内容を楽しまれたと私は聞きました。その説はいくつかあります。自ら悟りの内容を喜ばれたけれどもこれは説けない。話せない。解ってもらえない。死のうとする。ここだと思うのですね。『大経』の中の八相成道の中にもそのようなことがあります。そうしたら梵天がその説けない法を説いてほしいという、梵天ぼんてん勸請かんじょうなんです。天が説けない法を我々に説いてほしいと。では説けないけれど説こうと、面白いでしょう。誰に説こうかと。そこで一緒に苦行林で六年間修行をして、去っていった五人の比丘に説こうと鹿野苑に向かい、初めて説法したのが初転法輪です。この五人はひそかにお釈迦様のお父様である浄飯王が五人の屈強で優秀な家来をそっとお釈迦様の修行する山で共に修行させたという背景があるのです。お釈迦様がそれほどの苦行をして過去現在未来にお釈迦様のような苦行をしたという人はいないと。修行しても悟れない、それで山を下りたと。そう言う所がキーワードになるのですが、山を下るときは五人の比丘も一緒に降りてきた。皆さんが知っているでしょ。スジャータ。コーヒーに入れるミルク。私もインドに行きました。あれはスジャータ村なのです。スジャータという娘になっているけれども、あれはスジャータという村でした。村の娘さんが、あなたが死んで悟っても私たちは悟りを聞くことが出来ない。生きて悟って、人間の言葉で悟りを教えてほしいと。そうやって村の娘スジャータの出す乳粥、何と言いますか、「おじや」牛乳のご飯を食べたと言います。ゴータマ、お釈迦様をゴ

ータマと言います。五人の比丘は、ゴータマは墮落したと、村娘がちよつとといっただけでその気になって食べた。そういつて去っていった。その後一人菩提樹の下で結跏趺坐する。そこに通りかかった草刈少年が土の上に直に座るのでは冷たかろう、今刈ってきた草があるからといって、干し草を敷いて、その上に結跏趺坐して是非瞑想に入っていただきたい。お悟りを得ていただきたいと言つて干し草を布施した。これは草刈少年になっているけれども、吉祥天の化身、だったというのです。お釈迦様が悟った場所を草の座と言います。草の座で悟られた。インドに行きましたら菩提樹の下この座を金剛座と言っていました。さて余計な話をしましたが、問題はそのままでもいいか、ありのままでもいい。自分を依り所にして、ひとり立って実現していく。立派である。今日は皆これです。だけれどもそれでいきなさいと言う親ですか。それはよろしい、念仏をしつかり申していけよと。こう言うかという違いがあると思う。それだけでいかしては危ない。やはり念仏申していけよと。この違いだと私は思います。「あるがままを受け止めて念仏申す。」と。あるがままを受け止める。念仏申すかどうかの違いですよ。私はそう思った。念仏があるかどうかの違いです。人生はいろいろある。生老病死、誰も超えられない。右肩上がりに自分を実現することはできないのですから。上り坂、下り坂、まさかの坂の時には何処も自己責任です。時代社会の責任、親の責任、教育や世界の責任にもできない。結局自己責任。誰もたすけられないですよ。自分がギャツと言つたつて、それが地獄というか、そういうことで喩えて話されるの

ですが、要するに「念仏の一道彼岸に通ずる」。最後の方に私書いておいたと思います。要するにひとり立って自分をしっかり自我を固めてそうして大地に立って歩んでいく。自己を実現していく。そうして自分の幸福を実現するのだ。これ世間では正しいのですよ。それを間違っていると言ったら言った私が間違ってしまう。学校でも自我の確立ですからね。だから難しい。それだけでいいのか、ですよ。そこに念仏申していけよ。念仏だぞ。これが言える親になれるか。

先に歩むものです。先程、交通事故にあつて、家は浄土真宗だとお母さんから聞いていたので、交通事故にあつてから南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言っていた。（長谷川さんの言）私それを聞いて、そういうふうにして伝わるのだと思いました。浄土真宗と言った時のお母さんは、南無阿弥陀仏と言ったのだと思います。念仏だよ。どんなときにも阿弥陀様、親様はたすけてくれるんだよ。自分もおまえの親かもしれないけれど、自分も死んでゆく。しかし、浄土真宗では阿弥陀如来様が親様だから。そういう話を聞いていたのだと思う。だから、交通事故で無意識の中でも南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と出たのだと思う。感話をいただいて感動いたしました。ああなるほど、そうなのだと。要するに本当に共にたすかるかは、大いなる如来の本願、如来のお誓いの中で、我が名を呼べよ、と名に託されたその教えですから。さつき、誰かも南無阿弥陀仏は簡単だ、だけど難しいという話をしておりましたが、そう、簡単なのですよ。易行道ですから、念仏申す。それが難しいのですよ。私はこのレジュメに、なぜこう

簡単で難しいということ七五〇年伝えてくださった、今でも真まことと領けるか。それはお釈迦様が二五〇〇年、そうして悟られた。そうして、無常を超え、一切苦という苦しみを超え、迷いを超え悟られた。それを説けない。しかし、説けないのを説かれた。それが仏説となって、シルクロードを通り、中国で訳され、朝鮮を通り、日本に入ってきて、聖徳太子が訳されて、理解して、そして一七条の憲法、三宝を基として国を治めて行こうとしたのが東大寺大仏。国分寺を全国に作り、仏教を基として国を治めて行こうとしたのが聖徳太子。仏教伝来で最初に分かったのが聖徳太子ですからね。親鸞聖人は聖徳太子を本当に尊敬し、聖徳太子の和讃をたくさん読まれております。親鸞聖人は磯長の廟とか、六角堂の夢告も、聖徳太子が救世観世音菩薩の化身だったと頂かれた。聖徳太子を非常に尊敬しておられた。こういうことがあるわけでありませう。そういうことがあって、仏教二五〇〇年、真宗七五〇年ですけれども、なぜこんなに簡単で難しいのでしょうか。横江さんどうですか。いい味わいをして私をたすけて頂戴。『簡単すぎるので逆に疑いを生じる。そんなことで言いのかと。もっと本当は、南無阿弥陀仏は難しいのではないか、簡単なことを、簡単に考えることが意外に難しい。簡単なことを難しく考えてしまう。それが難しさ。』（横江氏の言）。なるほどね。土田さん、土田さんは三条別院で生まれてきたのだから大丈夫だよと、皆に聞こえるように言ってしまったのだけれど。あんまりにも簡単すぎて、究極のところ三条別院で生まれて育ってきたのですから、離れはしないけれども良かったと思うけどね。

『思えないですね。やっぱり自分の心を偽ってはいけないのですね。二つあるのですね。素直と素直でない和二つあって、いつでも、頭を出すのですよ。だから素直に聴けないのです。（土田氏の言）』。それが正常なのですよ。普通だと自分の中に二人の自分がおりますという、おまえ分裂症かと。そうではないですよ。志慶眞先生が「お念仏の開く世界」で、エゴとセルフと云う一人称の世界をユングの世界から展開してりましたが、正直に内観すれば二人の自分がおりますよ。エゴという自分を固めて行こうとする自分と、いやそうではないよと言う自分がいるのです。それが葛藤するのです。悩むというのはいいのですよ。普通悩むといけませんと言うけれど、悩む者こそ大きくなるのですよ。それは自分との葛藤だからです。自分の中で良いというのと、止めというのがいて、おれどうしたらいいのかと、分裂しているのではないかと思うけれど、そうではないですよ。人間は良く自分を見ればそういう自己内観があるのです。だから本当の自分とは何かと言えば、それが一切衆生悉有仏性といって、誰にも仏性がありますよ、と言うのが如来からのお釈迦さまの話ですよ。土田さんの中に仏性が在りますよ。エゴがいくらあつたつてその中に仏性がありますよと、その問題なのです。だけれども親鸞聖人の場合には、本当に仏性があるかと思つたらありませんでした。煩惱の身のままでありました。しかしこれを見捨てないということで、如来が我となつてくださる。見捨てないで、わたしとなつてくださっているという、こういう転回なのです。これ分からないのだよね。そこに、曾我先生のを書いたのです

が、要するに「如来・我と成る。我は如来にあらず。」これなのです。仏性あるから私は仏性開化して菩薩です。私は如来です。仏陀ですと言いたいけれど言えない。それをやってきたのが、お釈迦様が亡くなって五〇〇年、お釈迦様は八〇歳で亡くなったのですが、お弟子さんがいて五〇〇年悟るものがいた。それを正法と言った。ですけれども五〇〇年すると今度は像法、キリスト教で言えば偶像みたいな像を作って、そこに向かって、教えがあるから像を見ながら悟りたい。それが一〇〇〇年続くのですが、わずか悟るものが出たという説がある。像法一〇〇〇年、教えはつながっている。親鸞聖人は平安末から鎌倉初期です。天台宗を開いた最澄、伝教大師ですけれども、その説をとって、これにはいくつかの説がありますが、一つには正法五〇〇年、像法一〇〇〇年、末法一〇〇〇年、最澄の説をとって『教行信証』に述べております。計算すればもう末法に入っているのだと。要するに、末法では教えはあるけれども、救われるもの一人もなし。行証するもの一人もなし。行証すたれる。親鸞聖人が、先ほど私が表白で読んだでしょ。行証久しくすたれ、ということもあって悟るもの一人もなし。先きほど報恩講の二重に入ったところに

「釈迦の教法ましませど 修すべき有情のなきゆえに さとりうるもの末法に 一人もあらじ
とときたもう」(『正像末和讃』五〇五頁)

お釈迦様の教えはあるけれど、修行して悟るといふ人がいないゆえに、「さとりうるもの末法に一人もあらじとときたもう」。誰が説いていると思えますか。お釈迦様ですよ。お釈迦様が預言というか、預言と言うと誤解があるから、予見というか、お釈迦様が言われたのです。「一人もあらじとときたもう」といつて誰が説いたのか。お釈迦様がいつているのです。正像末、正法五〇〇年、像法一〇〇〇年、末法一〇〇〇年、そして教えは竜宮に隠れる、と言っているのです。「ときたもう」というのは、お釈迦様で經典にあります。平安末から鎌倉初期は、計算すると一五〇〇年を過ぎてしまってもう末法だと、だから教えがあっても、修行しても悟れない。自分も救われないし、人も救えない。これが親鸞聖人、法然上人の時。比叡山で悩まれた、真剣に学んで、真剣に修行して、悟ろうとした方なのです。丁度飢饉があり、源平の合戦がある。殺し合いがあり、飢饉があり、バタバタ死んでゆく。鴨川には死体がうずたかく積まれた。処理しきれないから、額に墨で梵字の阿弥陀の阿の字を書いていったというのが記録に在るわけです。そういうことで末法に入った。教えはあるけれども、行じても悟るものはない。行ずるものも形だけで、本当にできない。そういうことです。だからその資料に書いた、自力聖道門の菩薩修行の階梯五二段階とか、唯識五位とか、それから六波羅蜜とか、三学の戒・定・慧とか、そういうことを守って悟りを開くことになっているのですよ。形だけはあるけれど、形だけ行じているが、悟るものがない。しかし、それはお釈迦様が既に經典に言っているではないか。だから救え

ないのかと。物凄い危機感だったのです。法然上人は、お父さんが殺されるのですよ。漆間時国
と、いい岡山県美作ですから、宮本武蔵の所ですね。押領使です。元からの領主です。ところがも
っと偉いのが国から隣にやってきた。領地争いをして、結局国から来た隣の領主・明石源内武者
貞明に夜討ちにあつて殺されるのです。その時法然上人は九歳、「わたしが敵を討ちましょう」
と言ったら、お父さんが「怨みを持つて仇を討ったら永遠に誰も、敵も味方も、救われない。我
が菩提を弔え、敵も味方も救われる世界を求めていけ。」と、こう言われたという。だから法然
上人の命題というのは大きかった。要するに敵、味方共に救われる。ということなのです。敵を
討てば美談になるかもしれないけれど、それ又敵を討つ。リベンジというか。復讐劇は永遠に尽
きることはない。敵、味方共にたすかる道を求めよ。だから法然上人は課題が大きかった。優秀
だった。だから文殊菩薩（法然上人が比叡山に登られた時に言われた）文殊一体を送るなどと言
つて比叡山に送ったというのです。智慧第一の法然房、愚痴の法然房と言われたけれど結局、山
を下りて吉水で念仏を説いていかれたわけです。法然上人は智慧第一と言われた。当時、大原問
答というのがありました。そこで大勢の人を全部論破したのですよ。そういう凄い法然上人なの
ですよ。そういう法然上人のお弟子であった親鸞聖人も苦勞して、そうして二九歳の時の京都の
六角堂に百ヶ日籠ると。その中で九五日目の暁の中で、壁に女犯偈を見ると。それが救世菩薩の
お告げという。親鸞聖人は聖徳太子を救世観世音菩薩の化身と頂かれていた。要するに、女犯偈

というのは親鸞聖人にとって深い背景があるわけであります。それで吉水に訪ねて行って、法然上人に六角堂に通うがごとく百ヶ日、私が聞くところによりますと、若き親鸞聖人の思いのほどを、法然上人にぶつけて行ったのではないかと。あらゆる教学上の学問、自分の悩み、すべてだと思ふ。私がそこに立ち会ったのではないが、私が聞くところによると、若き親鸞聖人の思いのほどを法然上人にぶつけていった。百ヶ日通いながら。雨の降る日も雪の日も風のある日も。それが『歎異抄』に書いてある、

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」（『歎異抄』六二七頁）

と。要するに、法然上人は親鸞聖人の質問に対して、「弥陀にたすけられまいらすべしと。」すべてこうお答えしたのではないかと。こう聞きました。なるほどなあと。私みたく屁理屈言っていないで、ただ弥陀にたすけられまいらすべしと。私もそういえば法然上人の二枚目か三枚目になれるかと思いますが、なれませんよね。私は私を勤めなくてはならないのですが。要するに、そういうことです。弥陀にたすけられまいらすべし。南無阿弥陀仏なのです。そうすると、どんな理屈も、どんな思いもそれで打ち砕かれたのでしょうか。

だから、「雑行を捨てて本願に帰す。」ということですか。それは何かと言うと、「ありのまま、あるがままで行け」。英語で何というんだったか、「Let it go」、行って戻ってこいと言うこと、そ

うでもないか、ごめん。若いねえ。「ありのまま」それだけで行けと言うわけにはいかないのです。私は思ったのですが、「念仏を申していけよ。」といえればそれだけで、そうすれば及第ですよ。本人が交通事故にあつて南無阿弥陀仏と言ったくらい効き目があるのだから、南無阿弥陀仏は親が言った、こうして報恩講で聴いた、祖先が伝えてきた、この浄土真宗は何だと。聴聞と言つたけれど、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなしと。

「仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。」（『教行信証』二四〇頁）

（前述の土田さんの発言を受けて）土田さんは知っていて、究極の所を知っていて「聞」を語るのですから。（思えないですね。やっぱり自分の心を偽ってはいけませんね。二つあるのですね。素直と素直でないと二つあつていつでも頭を出すのですよ。だから素直に聴けないのです。土田氏の言）

非常に罪ですよ。（笑い）、罪の人ほどたすかるといいますから。逆説はなかなかありがたいと思うのですが。知っているのですね。まあ、そういうことで。いわれを聞くということですよ。願恩といいますから。摂取不捨の真言。あなたを見捨てない。あなた一人に立つ。あなたが救われなくては私は仏とならない。四八願はそういう誓いです。不取正覚とはあなたが救われなくて

は私は仏とならない。土田さんそういうことですよ。土田さんが救われなくては仏は仏とならない。永遠にですよ。安心して迷っていきなさい。念仏して。時間がきてしまいました。骨子から外れているか、外れていないか、外れていないと思うけれど。要するに、聖道門では悟ることができない。これが法然上人、親鸞聖人の、いのち懸けの悲願だったのでした。当時の比叡山は東大のようなものですから。そこで真面目に学びながら修行し、自らもたすかり、一切もたすかるようにしていきたい。燃えている優秀な人たちの集団ですからね。そこで真剣に悩む。そういう中のご苦労があつて、お釈迦様のご苦労から、七高僧から、こう流れてきて、親鸞聖人があつて報恩講をお勤めして、「願恩と教恩」という中に、本当に家の宗旨としてはたらいてくださった。そのいわれを本当に尋ねなくては、私は申し訳ないと思います。そして私は思うのは、ありがたいことに在家からきたのです。家の宗旨は浄土真宗と、小学校四年生の時に聞いたけれど、神棚にお参りするような時代ですからね。戦後、あとで学んで分かったのですが、明治の時に廃仏毀釈で、それまでは神仏混交だったので、江戸時代までは。明治になって、国家神道となつて、天皇を現人神として寺院をすべて破壊することだった、僧も、全部還俗させると。それが廃仏毀釈ということです。こんな話がありますよ。浄土真宗も仏教各宗派も、神主の格好をして、こうして神社庁に集まったというからね。だけでも、仏教を残してほしいとお西の、当時は法主と言ったが、仏教会をまとめて国に陳情したと、仏教を残してほしいと。国に忠誠を誓うのなら

残そうと。取引というか、そういうことがあって残ったというのです。厄介な話だと思います。中国だって、文化大革命の時に寺院を壊したりして、僧侶を還俗させたというけれど、今形だけ残っていたって、逆に日本の方が大乘仏教としてあるのではないかと。本当に中国にご恩をお返しをしなくてはならないと、細川先生が言っていましたけれど。池田君中国に行ってくれと。いいえ、行きません。私は家族がいるし、子供が小さいからと言いました。この間九州へ行ったら青木さんが言っておりました。先生が言ったらなぜハイと言わなかったのかと、青木さんが言っておりました。私は軟弱でまだ家族のことが心配であったと。ご恩があるのに、中国に行ってお返しをしなくてはならないのに、皆自分の都合の言い訳で、（笑い）、私はそう言ってお断りはしたのですが、罪悪感が残っていた。文化大革命で僧侶は還俗させられて滅ぼされるようになり、今は形だけ残って観光みたく残っているけれども、日本に仏教は残っている。これを朝鮮、中国に。インドだって仏教徒は二、三パーセントだそうで。親鸞聖人がこの粟散片州ぞくさんへんしゅう、ユーラシア大陸東の粟粒のような点々とした島国の日本が、日本ですよ。粟粒が散らかっているような島国の日本が大乘相應の地だと。ユーラシア大陸、仏教東漸といって、東へ東へと来た。なんで西へ行かなかったかと思うけれど。東へと、砂漠を渡って、海を渡って来たのだから。

日本に大乘相應の地として残っている。これをお返ししなくてはならないのではないか。先生に池田君中国へ行ってくれよと言われて、いや家族がいますから。軟弱だね。今、我が子が皆坊

主になって、あれだけの説法を、浄土の出店のようにちよつと変わったトークで話せるようになってくると思いながら、私は旧態依然のアンティーク骨董品のように話してみただけで、どうでございましたか。(笑い)。

一人で笑っているよなあ。一つもおかしくないのに。そういうのが親子二代の副講と本講の話でしたが、言わんとすることは副住職からもらって繋げば、ありのままとか、あるがままという中に念仏がなければいけない。ありのまま南無阿弥陀仏。あるがまま南無阿弥陀仏。何があっても南無阿弥陀仏だぞ、という座りがないと、ふらふら、こうだと思った、こうだと思つたと。結局立つ瀬がなかったことになる。仏法の幽霊話で終わりにしたいと思いますが、円山応挙は日本の幽霊画の代表だよ。髪が長くて、手が曲がっていて、足がない。こういう形だと。日本で幽霊を見ると、皆円山応挙のような幽霊みたいなのを見るそう。(笑い)。西洋だと手があつて、足があつて、牙はある。ドラキュラのようなものを見るというのだそう。日本の幽霊は足がなくて、こうして出るのだよ。本当かどうか知らないけれど。昔は一本傘とか、破れ提灯のようなものがあるかもしれないけれど、ろくろ首もあるかもしれないけれど、皆そういう幽霊になる。面白いよね。だけど、ある人が言った。たとえば、私が幽霊と思うか。幽霊の姿を私はしたくないのだが、髪が長くて過去の思いに引きずられている。手が曲がっているのは何でも。自分の方に引き寄せて、がりがり亡者となり、自分の物になればいいと手が曲がっている。

足がないのは立つ立脚地を持っていない。それは誰のことですか。私の事でした。過去に引きずられる。なんでも自分のものにする。立つ瀬が無くて立脚地がなく足がない。幽霊は私の姿でしたとまとめると、どうでしょう。いい報恩講になったかい。ヒュードロな感じ。清沢満之の、おそらく間違っていないければ四〇歳少し手前に言われた言葉だと思う。先程副住職も、清沢満之の言葉、「自己とは他なし 絶対無限の妙用みょうゆうに乗託じやうたくして任運にんうんに法爾ほつにに、現前の自己げんぜんに落在するものこれなり。」とか、有名な言葉があります。その清沢先生が臘扇ろうせんから、浜風ひんぷうと言う頃で亡くなつていくのですよ。それは自分の号にしたのですが、浜風、これが最後なのです。臘扇とは冬に扇子で、夏に炬燵こたげということは無駄なことであるが、私が無駄な存在だということが、臘扇ということなのです。浜風が最後の号で亡くなっていくわけです。その時、ヒュードロといつて死んでいったというのですが、なかなかユーモアがあるなあと、私もヒュードロと、清沢満之となるべく噛み合わせて、ラップするように、苦労しているのだよ。私のレジュメに合わせながら話そうとして、どうだ。私のほうが芸か。(ありのままの住職の話で良かったと思います。副住職の言)

漫才の節談説法は、芸能の原点だという話しを川澄さんが言われたりしたけれど、感話からとったり、副住職の話からとったり、私の書いたものから合わせたり、何とかして櫟先生の後塵を拝して、留守番役をやってみたが、まだ落第ですな。言わんとすることは、お念仏を申しましょ

うということ、是非聴聞してともにまいりたいと思います。宜しくお願いいたします。
有難うござ座居ました。

あとがき

本書は平成二六年十月二十六日、第二十四回報恩講における住職と副住職の法話の記録です。今まで報恩講にご出講されておりました櫛先生は平成二五年に胆嚢摘出手術をされ、その後、九月の会座には復帰され、十月の報恩講へご出講いただきましたが、平成二六年一月に心筋梗塞で入院され、その後、カテーテルの手術を受けられて、鹿児島のご自坊にてご静養されておられる事情から、今回は、光照寺住職が本講、副住職が副講ということで報恩講のご法話を担当しました。

毎年勤める報恩講の緊張と法話を勤める緊張とが交錯し、例年と違った報恩講を厳修しました。法話では何をお話しようかと思ひ、結局、前日にまとめたというのが正直なところです。活字にされたのを読み返すと、もつと吟味してお話するべきだったと思ひましたが、今の自分自身を知らされたと同時に、ご恩徳に応えた生活をしているかどうかが問われたことであります。今まで櫛先生からお聞かせ頂いた「願恩と教恩」の心を大事に持ち続け、これからも聞法していきたいと思います。

住職には原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってく

れた役僧の池津徳彦氏に感謝申し上げます。

合掌

平成二七年十一月一日

第二十五回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎